

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

1日

仏滅心

旧10月1日

金曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

によらい あん らく

しょうびょうしょうのう

如来安楽 少病少恼

「如来は安楽にして、少病少恼なり」

四大菩薩がお釈迦さまに「安楽にして少病少悩にいらっしやいますか」とお尋ねになったの対して、お釈迦さまは「娑婆世界の衆生は教化し易く、疲れもない」とお答えになりました。

お釈迦さまから見れば、娑婆世界の人々は仏に成るべき本性を持っているので、早いか遅いかの差があっても、皆いつかは仏に成ることがわかってるので心配していませんとおっしゃった大慈悲を表しています。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰  
2024年

11月

2日

大安 尾  
旧10月2日

土曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

ご し ねん けん ご う だい にんにく りき

其志念堅固 有大忍辱力

「自分に厳しく、他者にやさしく」

自分の志は堅固に厳格で、他者に対してはその過ちを許し、その罪をとがめず、平和な気持ちをもって対応する人には徳が具わります。教えを弘める者にそのような徳があれば、自然と人が集まり、その徳がある人のようになりたいと教えを実践する信者が増えていくのです。しかし、自分に厳しく、他者にやさしく接するのは容易なことではありません。日々自分を見つめることが大切です。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

3日

文化の日

赤口 箕

旧10月3日

日曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

所将諸眷属

しよ

ししよう

しよ

けん

ぞく

「地涌の菩薩にはそれぞれに従者がいました」

大地から涌き出したたくさん菩薩たちはそれぞれに従者を連れていました。

ある菩薩はガンジス川の砂の数の何万倍もの従者を連れ、ある菩薩は数百人、数十人の従者を連れ、中には従者無く一人の菩薩もいました。

教えの伝え方は一様ではなく、大勢で世の中に呼びかける方法もあれば、一人で静かに考えて軽々にものを言わず、ひとたび口を開けば心の奥底に届く言葉を発する方法もあります。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

4日

先勝 斗

旧10月4日

月曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

従じゆう誰すい初しよ発心ほつ しん

「誰に導かれて初めて発心したのか」

「発心」とは、ただ仏さまを拝んだり、仏教を学んだりすることではなく、仏さまの教えの通りに実践しようと誓うことです。

発心したのが何百年・何千年前だとしても、その発心が堅固であれば、生まれ変わりを繰り返しながら、仏弟子として仏さまに導かれ、その教えを実践し続けることができます。

弥勒菩薩は目の前に現れた地涌の菩薩たちが誰に導かれて発心をしたのか疑問を持ちました。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

5日

友引 女

旧10月5日

火曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

しゅ しゅう が ぶつ どう  
修習何仏道

「何れの仏道を修習せる」

「修」は実行すること、「習」は繰り返すこと。

私たち凡夫は一つ善い事をして、なかなかそれを継続することができないものです。

毎日お経を読み、内容を理解し、実践を繰り返して、少しずつ自分のものにするのです。

実践の繰り返しのなかで、自分に足りないものが見えてきて、それを補いながら次の実践を繰り返す、日々の修行の継続がいかに大切かを伝えていきます。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

6日

先負 虚

旧10月6日

水曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

が お し しゅ ちゆう ない ふ しき いち にん

我於此衆中 乃不識一人

「地涌の菩薩を一人も知らない」

弥勒菩薩は地涌の菩薩たちに一人も見知った者がいないことに疑念を抱き、どのような縁がつて目の前に現れたのか教えていたただきたいとお釈迦さまに申し上げました。

お釈迦さまと地涌の菩薩たちは、過去から現在までの深い関係を教えていたただき、皆の疑念を解いてくださるようお願いしたのであります。

法華経のみに出現される地涌の菩薩の正体がいよいよ明かされるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

7日

立冬

仏滅 危

旧10月7日

木曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

いっ ぽん に はん

一品二半

「法華経の中心の大事な教え」

「一品二半」とは、湧出品の後半と寿量品の一品と分別功德品の前半を指し、法華経の中心の大事な教えが説かれているところです。

経典にはたくさんのおんさまが登場し、さまざまに教えを説きますが、その根本には永遠の命を持つお釈迦さまが存在することが説かれます。唯一のおんさま本仏釈尊が、末法の衆生のために説かれた法華経の絶対性が説かれる部分です。日蓮聖人もこの一品二半を重要視されました。

妙法蓮華經從地涌出品第十五

爾時世尊。於諸菩薩大衆中。而作是言。如是如是。諸善男子。如来安樂。少病少惱。諸衆生等。易可化度。無有疲勞。所以者何。是諸衆生。世世已來。常受我化。亦於過去諸仏。供養尊重。種諸善根。此諸衆生。始見我身。聞我所説。即皆信受。入如来慧。除先修習。学小乘者。如是之人。我今亦令。得聞是經。入於仏慧。爾時諸大菩薩。而説偈言

〔略〕

無量千万億 大衆諸菩薩 昔所未曾見 願兩足尊説 是從何所來 以何因縁集  
巨身大神通 智慧諫思議 其志念堅固 有大忍辱力 衆生所樂見 為從何所來  
一一諸菩薩 所將諸眷屬 其數無有量 如恒河沙等 或有大菩薩 將六万恒沙

〔略〕

誰為其説法 教化而成就 從誰初發心 稱揚何仏法 受持行誰經 修習何仏道  
如是諸菩薩 神通大智力 四方地震裂 皆從中涌出 世尊我昔來 未曾見是事  
願説其所從 国土之名号 我常遊諸国 未曾見是事 我於此衆中 乃不識一人



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

8日

大安 室

旧10月8日

金曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

ひ しょう じん がい

被精進鎧

「精進の鎧を被る」

「精進」とは混じり気のない心持を持って進むということ。

私たちは混じり気のない心持で物を考えているつもりでも、いつの間にか他のことに心を動かされ純粹さを失っていくものです。

「精進の鎧を被る」とは、鎧に身を固め敵陣に飛び込むくらいの決心をもって、混じり気のない心持ちで仏さまの教えを学び、実践していくということです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

9日

赤口 壁

旧10月9日

土曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

諸しよ仏ぶつ獅子し奮し迅ふん之じん力し

「諸仏の獅子奮迅の力」

仏さまがすべての衆生に教えを説かれる際には、獅子奮迅の力。全力を持って臨まれます。私たちは力を抜いてよい場面だと判断すると、それなりに力を調整してしまいます。常に全力を出し続けていると身も心も疲弊し、必要なときに力を出せなくなってしまう。仏さまは全力を出し続けても疲れることなく、私たちを導くことができます。私たちが救いたいという慈悲の表れです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

10日

先勝 奎

旧10月10日

日曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

しよ ぶつ い みよう だい せい しりき

諸仏威猛大勢之力

「諸仏の威猛大勢の力」

「威猛大勢の力」とは、仏さまが周囲を感化する力です。

「威」とは脅すという意味ではなく、人を動かす力を指します。

仏さまの教えが自然に周囲を動かし、どんな人でも仏さまの教えによって心が改まっていくということです。

それほどに大きな力を持つ仏さまの教えを信じ、実践するようにと説かれているのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

11日

友引 妻

旧10月10日

日 月曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

じゆう お にん ぜん ちゆう

住於忍善中

「信心によって忍善を維持する」

「忍善」とは善い事をいつまでも続けて怠ら  
ずに行うこと。

私たちは善い事をやり始めても、少しでも悪  
い結果が出るとやめてしまったり、手を抜い  
てしまったりします。

始めから終わりまで同じ熱心さで続けるのは  
難しいものです。

仏さまの力が自分の心に通うことによって、  
「忍善」が維持できるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

12日

先負 胃

旧10月11日

火曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

が こん あん に によ

我今安慰汝

「我、今汝を安慰す」

「安慰」とは、心を安らかにして慰めること。

お釈迦さまの教えは広大で理解し難いと聴衆が感じると不安が膨らむものです。

しかし、お釈迦さまは聴衆を失望させるために教えを説くのではなく、「安慰」させるために説くのだと念を押されました。

私たちも仏に成れるのだと言われても、道が遠すぎると諦めず、疑ったり怠けたりすることなく努力することが大事です。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

13日

仏滅 昴

旧10月12日

水曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

ちようぶくごしん

調伏其心

りようほつどうい

令発道意

「地涌の菩薩を調伏し、道意を起こさせてきた」

「調伏」とは、乱れた心を調え、悪い心を抑えるように正しく導くこと。

「道意」とは、仏さまの教えの通りに実行しようと決心すること。

お釈迦さまは、地涌の菩薩たちを「調伏」し、「道意」を起こさせてきたのだと、弥勒菩薩にお伝えになりましたが、お釈迦さまが地涌の菩薩たちをいつ教化してきたのかと、弥勒の疑問は膨らむばかりでした。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

14日

大安 畢

旧10月13日

木曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

どくじゆ つうり

しゆい ぶんべつ

しやうおくねん

読誦通利

思惟分別

正憶念

「經典を読む心得」

「読」は經典の文字を見ながら読むこと。

「誦」は經典の意味を深く考えること。

「通利」は經典の意味を正しく理解すること。

「思惟」は經典の文字に表れていない深い意味を  
考えること。

「分別」は經典を日常に引き合わせ考えること。

「正憶念」は前の五つのことを忘れないこと。

「読・誦・通利・思惟・分別・正憶念」が整うこ  
とが經典を読む心得なのです。

# 妙法蓮華經從地涌出品第十五

釈迦牟尼仏。之所授記。次後作仏。已問斯事。仏今答之。汝等自當。因是得聞。爾時釈迦牟尼仏。告弥勒菩薩。善哉善哉。阿逸多。乃能問仏。如是大事。汝等當共一心。被精進鎧。發堅固意。如来今欲。顕發宣示。諸仏智慧。諸仏自在。神通之力。諸仏師子奮迅之力。諸仏威猛大勢之力。爾時世尊欲重宣此義。而説偈言

當精進一心 我欲説此事 勿得有疑悔 仏智諫思議 汝今出信力 住於忍善中  
昔所未聞法 今皆當得聞 我今安慰汝 勿得懷疑懼 仏無不実語 智慧不可量  
所得第一法 甚深諫分別 如是今當説 汝等一心聽

爾時世尊。説是偈已。告弥勒菩薩。我今於此大衆。宣告汝等。阿逸多。是諸大菩薩摩訶薩。無量無數。阿僧祇。從地涌出。汝等昔所未見者。我於是娑婆世界。得阿耨多羅三藐三菩提已。教化示導。是諸菩薩。調伏其心。令發道意。此諸菩薩。皆於是娑婆世界之下。此界虚空中住。於諸經典。誦誦通利。思惟分別。正憶念。阿逸多。是諸善男子等。不樂在衆。多有所説。常樂靜処。勤行精進。未曾休息。



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

15日

赤口 菊

旧10月15日

金曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

ふぎよう ぎい しゅ た う しよ せつ

不樂在衆 他有所説

「衆に在って多く諸説あることを樂(ねが)わず」

できることなら自分独りで仏さまの教えを味わい、楽しみ、有難いと思っていたいというのが、地涌の菩薩たちの望みでした。

しかし、世の中に迷っている人があまりにも多く見るに忍びないので、休息することもなく教えを説いているのが地涌の菩薩です。

人前で教えを説いて喝采を浴びたいというのではなく、止むに止まれぬ状況に追い詰められて決意と使命をもって説くのが地涌の菩薩です。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

16日

先勝 参

旧10月16日

土曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

従無数劫来 修習仏智慧

「量り知れない時間、仏の智慧を修習してきた」

地涌の菩薩たちは量り知れないほど遠い昔から  
仏の智慧を修習していました。

「修習」とは、繰り返し習い自得すること。

仏さまの教えは一度や二度聴いたくらいで身に  
付くものではありません。

仏の智慧を自分のものとして世間の人々を救い  
たいという強い決意をもって、遠い前世から量  
り知れない時間をかけて修習してきたのです。  
私たちも心して仏道を歩みましょう。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

17

日

友引 井

旧10月17日

日曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

じょうぎょうずだじ

## 常行頭陀事

「常に頭陀の事を行じ」

「頭陀」とは、物質的な欲望を打ち払うの意。

仏道修行者が衣・食・住の少欲知足を行ずるために、十二種の頭陀行が説かれています。

そのいくつかを挙げると、「里離れた静かな場所に住む」「常に乞食を行ずる」「一日に一食とする」「食べ過ぎない」「新しい衣を食らわない」「墓場に住む」「仏の如く樹の下に坐して思惟する」「空地に坐る」「常に坐して横にならない」など、質素儉約の生活が説かれています。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

18日

先負 鬼

旧10月18日

月曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

がくしゅう が どう ほう ちゅう や じょうしようじん

学習我道法 昼夜常精進

「昼夜に常に精進し、仏さまの教えを学習する」

地涌の菩薩たちは、お釈迦さまの教えを繰り返して学び、昼夜に常に精進して、この娑婆世界に住んでいました。

悩み苦しみが深い娑婆世界にて仏道修行を積むことにより、人を救う力が身に付くのです。

私たちが仏道修行をする姿が示されている経文でもあり、「昼夜常精進」の句を心に刻み、怠る気持ちが生じたときに思い出し、自己を励ましたいものです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

19日

仏滅 柳

旧10月19日

火曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

しねん りきけん ご じようごん ぐちえ

志念力堅固 常勤求智慧

せつしゆじゆみようほう ごしん むしよ

説種種妙法 其心無所畏

「強い意志で仏の智慧を求め、畏れず法を説く」

自分は仏に成りたいという強い意志「志念力」をもつて、迷うことなく仏さまの智慧を求めていくと、立場や境遇が違ふ人々に教えを説くことができるようになります。教えを説く相手の地位や気持ち慮りすぎると畏れが生じ、心が揺れて本当の教えを伝えることができなくなります。仏さまの智慧が身に付いていれば、畏れることなく法を説くことができます。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

20日

大安 星

旧10月20日

水曜

妙法蓮華経 從地涌出品第十五

に ない きょうけ し りようしよ ほつ どうしん

爾乃教化之 令初發同心

「遠い昔から地涌の菩薩たちを教化してきた」

お釈迦さまは最初に小乗の教えを説かれ、浅い  
教えを手掛かりとして深い教えへと進み、仏さ  
まの悟りへと衆生を導かれます。

地涌の菩薩たちにも同じように、小乗の教えか  
ら教化をはじめ、地から涌き出した今、初めて  
自らも仏を目指し、娑婆世界の衆生を教化しよ  
うという心を起こすように導いたのです。

お釈迦さまは遠い昔から、地涌の菩薩たちを教  
化してきたことを明らかにされたのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

21日

赤口 張

旧10月21日

木曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

が じゆうく おんらい きようけ ぜとうしゆ

我従久遠来 教化是等衆

「お釈迦さまは久遠の昔から教化してきた」

お釈迦さまが菩提樹下でお悟りを開いてから四十余年しか経ていないのに、地涌の菩薩たちを久遠の昔から教化してきたというお言葉に、聴衆は大きな疑問を抱きました。

その疑問の高まりに乗じて、お釈迦さまは久遠の昔から仏であったことを『如来寿量品第十六』にて説かれるのです。

様々な伏線が張られた法華経を『序品第一』から順に読んできたからこそ生じる疑問です。

# 妙法蓮華經從地涌出品第十五

此諸菩薩。皆於是娑婆世界之下。此界虛空中住。於諸經典。誦誦通利。思惟分別。正憶念。阿逸多。是諸善男子等。不樂在衆。多有所說。常樂靜處。勤行精進。未曾休息。亦不依止。人天而住。常樂深智。無有障礙。亦常樂於。諸仙之法。一心精進。求無上慧。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

阿逸汝當知 是諸大菩薩 從無數劫來 修習仙智慧 悉是我所化 令發大道心

此等是我子 依止是世界 常行頭陀事 志樂於靜處 捨大眾喧鬧 不樂多所說

如是諸子等 學習我道法 晝夜常精進 為求仙道故 在娑婆世界 下方空中住

志念力堅固 常勤求智慧 說種種妙法 其心無所畏 我於伽耶城 菩提樹下坐

得成最正覺 轉無上法輪 爾乃教化之 令初發道心 今皆住不退 悉當得成仙

我今說實語 汝等一心信 我從久遠來 教化是等衆



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

22日

小雪

先勝 翼

旧10月22日

金曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

うん が お し しょう じ

云何於此少時

「短時間にいかに教化してきたのか」

お釈迦さまはこれまでの説法の中で、人々のたくさんの疑問を解き明かしてきましたが、四十年という短い期間に、量り知れないほどたくさんの方の地涌の菩薩をいかに教化したのかという疑問は、聴衆にとって最大の疑問でした。

この疑問に明快な答えを得られなければ、お釈迦さま一代の教えがすべて泡沫となり、衆生が救われないことになってしまいます。

そこで『寿量品』の重要さが際立つのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

23日

勤労感謝の日

友引 軫

旧10月23日

土曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

父ふ少しょう子しの問とい

「青年が百歳の老人を我が子だと言う疑問」

四十余年という短い期間に、量り知れないほど  
たくさんの地涌の菩薩を教化したということ  
は、例えば二十五歳の青年が百歳の老人を我が  
子であると言い、老人も青年を我が父であると  
言うのと同じくらい信じ難いことなので、どう  
かこの疑問を解いてくださいと、弥勒菩薩はお  
釈迦さまにお願いしました。  
弥勒菩薩をはじめとする聴衆が、この疑問によ  
って相当に混乱していることがわかります。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

24日

先負 角

旧10月24日

日曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

ぜん

にゆう

しゆう

じゆう

善入 出住

「善き教えに入・出・住する」

「入」とは、教えの中に入ること、経文を読んだり  
教えを聴いたりすること。

「出」とは、世の中の人々のために教えを説き、  
人々を救い導くこと。

「住」とは、教えの中に身を置き安住すること。

仏さまの教えを学び、人に説くことによって、  
教えが身に付き、はじめて教えの中に安住する  
ことができるのです。

入出自在であることが安住につながるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

25日

仏滅 亢

旧10月25日

月曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

が  
ん  
い  
げ  
せ  
つ  
じ  
よ  
が  
と  
う  
ぎ

## 願為解説 除我等疑

「私たちの疑いを除くようお願いいたします」

聴衆の中には「新発意(しんぼっち)の菩薩」といわれる  
教えを学び始めたばかりの修行者がいました。  
新発意の菩薩たちは、お釈迦さまの教えに一つ  
でも疑問を抱くと、教えの全てが怪しいのでは  
ないかと疑いを持つようになります。  
そうならないためにも、この疑問を解くように  
弥勒菩薩はお釈迦さまにお願いをしたのです。  
仏さまの教えに疑問を持たないようにと、私た  
ちのために説かれた経文でもあるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

26日

大安 氏

旧10月26日

火曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

ふぜんせ けんぼう によ れんげざい すい

不染世間法 如蓮華在水

「世間の法に染まらず 蓮華の水に在るが如し」

地涌の菩薩たちの仏道を身に着け、俗世と関わりながら人々を導く姿は、まるで泥水にも染まらず美しい花を咲かせる蓮華のようでした。

自分だけの悟りに留まることなく、世間の煩わしさに影響されずに教化を続ける姿は仏道修行者の理想です。

しかし世間の中で生きていけば、俗事に引き込まれてしまうので、心身を浄める水行や唱題修行の時間が必要になるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

27

日

赤口 房

旧10月27日

水曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

端正たんしょう有う威い徳とく

「端正にして威徳有り」

迫害や誘惑に屈しない堅固な心を持ち、怒ることとも怯えることもなく、心淨く、立ち振る舞いも端正で、相手に応じて言葉をかけ導く大きな威徳を持っていたのが地涌の菩薩たちでした。弥勒菩薩をはじめとした聴衆は、地涌の菩薩たちの姿を見ただけで、その威徳に驚嘆していたことが読み取れます。だからこそ、お釈迦さまが地涌の菩薩をいかに教化してきたかという疑問が膨らむのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

28日

先勝 心

旧10月28日

木曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

しょうげ ふしんしゃ そくとうだあくどう

生疑不信者 即当堕恶道

「疑いを生じたものは悪道に堕ちる」

弥勒菩薩は、この説法のない者や未来の人々が、お釈迦さまの教えに疑問を持ったり、他者の信仰の妨害をして、その罪により地獄・餓鬼・畜生の三悪道に堕ちてしまうことがないように、疑問を解いてくださいとお釈迦さまに懇願しました。

『従地涌出品』後半では、何度も地涌の菩薩をいかに教化してきたかという疑問が取り上げられ、『如来寿量品』へとつながるのです。

# 妙法蓮華經從地涌出品第十五

世尊。云何於此少時。大作仏事。以仏勢力。以仏功德。教化如是。無量大菩薩衆。

〔略〕

譬如有人。色美髮黑。年二十五。指百歳人。言是我子。其百歳人。亦指年少。言是我父。生育我等。是事難信。仏亦如是。得道已來。其實未久。而此大衆。諸菩薩等。已於無量千萬億劫。為仏道故。勤行精進。善入出住。無量百千萬億三昧。得大神通。久修梵行。善能次第。集諸善法。

罪業因縁。唯然世尊。願為解説。除我等疑。及未來世。諸善男子。聞此事已。亦不生疑。爾時弥勒菩薩。欲重宣此義。而説偈言

〔略〕

善学菩薩道 不染世間法 如蓮華在水 從地而涌出 皆起恭敬心 住於世尊前 是事難思議

〔略〕

志固無怯弱 從無量劫來 而行菩薩道 巧於難問答 其心無所畏 忍辱心決定 端正有威徳

〔略〕

願仏為未來 演説令開解 若有於此經 生疑不信者 即当墮惡道 願今為解説 是無量菩薩

〔略〕



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

29日

友引 尾

旧10月29日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

じゅりよう

## 寿量

「お釈迦さまの寿命とその功德」

「寿量」とは如来の寿命とその功德を量ること。

『寿量品』に説かれる永遠の寿命を持つお釈迦さまは「久遠実成の釈尊」「久遠本仏」など呼ばれ、歴史上インドに生まれたお釈迦さまと区別されます。

久遠の本仏は一切の諸仏を統一する唯一絶対の仏であり、久遠の過去より私たちと縁を結んだ父子の関係にある仏であり、主師親の三徳を円満具足するのは仏であると説かれています。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

11月

30日

先負 箕

旧10月30日

土曜

妙法蓮華経寿量出品第十六

じょう

たい

## 誠諦

「お釈迦さまが心のままに説かれた真実」

「誠」とは偽りのない心、「諦」とは徹底的に明らかにすること、「誠諦」とは真実の教えを示し、「方便」と相対する表現です。「方便」は教えを聴く側にわかりやすく説くことで「随他意」ともいわれます。それに対して「誠諦」は、お釈迦さまが心のままに真実を説くことで「随自意」といわれます。真実をありのままに説かれるので、我々凡夫には難信難解であるのです。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

爾爾時仏告諸菩薩。及一切大衆。諸善男子。汝等當信解。如來誠諦之語。復告大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。又復告諸大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。是時菩薩大衆。彌勒為首。合掌白仏言。世尊。唯願說之。我等當信受仏語。如是三白已。復言。唯願說之。我等當信受仏語。爾時世尊。知諸菩薩。三請不止。而告之言。汝等諦聽。如來秘密。神通之力。一切世間天人。及阿修羅。皆謂今釈迦牟尼仏。出釈氏宮。去伽耶城不遠。坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我實成仏已來。無量無邊。百千萬億。那由佗劫。譬如五百千萬億。那由佗。阿僧祇。三千大千世界。假使有人。抹為微塵。過於東方。五百千萬億。那由佗。阿僧祇國。乃下一塵。如是東行。尽是微塵。諸善男子。於意云何。是諸世界。可得思惟校計。知其數不。彌勒菩薩等。俱白仏言。世尊。是諸世界。無量無邊。非算數所知。亦非心力所及。一切声聞。辟支仏。以無漏智。不能思惟。知其限數。我等